2010年度 活動報告(10月~3月)

■講演会・ワークショップ等■

- ●10月2日 国際日本語教育部門主催 第2回ワークショップ「日 本語とアラビア語~対照研究と教育への応用~」 エルカウィー シュ・ハナーン (エジプト・カイロ大学)、エバ・ハッサン (東京大学)
- ●10月16日 社会言語部門主催 講演会 「台湾 『宜蘭クレオー ル』について」真田信治(大阪大学名誉教授・奈良大学)
- ●11月12日 比較日本文化部門・国際連携推進部門共催 研究会 「『牡丹灯籠』の旅一中国、日本、ベトナム」 マティルデ・マスト ランジェロ (イタリア・ローマ大学)、ドアン・レー・ザン (ベトナム・ ホーチミン市人文社会科学大学)、許麗芳(中国・台湾彰化大学)
- ●12月7日 国際日本語教育部門主催 講演会 「日本語教育のた めの言語学:日本語の言語構造と日英対照の視点から」 ウェス リー・ヤコブセン (U.S.A.・ハーバード大学)
- ●12月11日 比較日本文化部門・国際連携推進部門共催 国際シ ンポジウム「e-Japanology の構築に向けて」 佐野洋・友常勉 (東京外国語大学)、辻澤隆彦(東京農工大学総合情報メディアセ ンター教授)、中山正樹 (国立国会図書館総務部情報システム課 長)、マルラ俊江(UCLA 東アジア図書館日本文献司書)、林和弘(日 本化学会学術情報部課長)、桂川潤(ブックデザイナー)
- ●12月17日 第2回若手研究者ワークショップ「台湾に渡った日本 **語の現在-リンガフランカとしての姿-」**簡月真(台湾国立東華大学)
- ●12月18日 対照日本語部門主催 「外国語と日本語との対照言語 学的研究」第3回研究会

南潤珍、高垣敏博(東京外国語大学)、井上優(国立国語研究所)

- ●1月28日 社会言語部門主催 講演会 「言語喪失と言語学の反 **応
 -琉球諸島のケース」**パトリック・ハインリッヒ(獨協大学准教授)
- ●3月17日 研究会「国際日本研究の構築に向けて」^{開催延期} 趙華敏(北京大学) 徐興慶(台湾大学) 于乃明(台湾政治大学) 蕭幸君(台湾東海大学) 任榮哲(韓国中央大学) 白戸伸一(明治 大学) 王敏(法政大学)

■海外大学・研究機関調査

- ●10月13日~18日 タイ(タマサート大学、チュラロンコン大 **学)** 早津恵美子<対照日本語部門>
- ●11月26日~12月3日 エジプト(カイロ大学:招聘講演) 谷口龍子 < 国際日本語教育部門 >
- ●12月1日~4日 台湾(台湾大学:招聘講演) 野本京子 <比較日本文化部門>
- ●3月20日~29日 スペイン(マドリードコンプルテンセ大学、 バルセロナ自治大学) 高垣敏博<対照日本語部門>
- ●3月21日~28日 イギリス(SOAS、国際交流基金、エジンバ) ラ大学) 澤井雅子
- ●3月29日~4月3日 アメリカ合衆国(ハワイ AAS 学会発表) 前田達朗 < 社会言語部門 >

■会議歴■

●センター会議:2010年10月8日、11月11日、1月13日、2月18日 ●部門会議:2010年10月15日、26日、11月16日、12月8日、 2011年1月26日、2月21日、3月3日

発行 東京外国語大学国際日本研究センタ-

〒183-8534 東京都府中市朝日町 3-11-1 アゴラ・グローバル 2F TEL 042-330-5794 E-mail info-icjs@tufs.ac.jp URL http://www.tufs.ac.jp/common/icjs

- Symposiums and Lectures • 2 Oct. 2010: The 2nd Workshop "Japanese and Arabic Languages: Application to Comparative Study and *Education*" by Hanan Rafik Mohamed El-kawiish (Cairo University), Eba Hassan(Tokyo University)
- 16 Oct.: Lecture "Yilan Creole in Taiwan : A Japaneselexicon Creole" by Shinji Sanada(Nara University)

Activity Report

- 12 Nov.: Research Conference "The Journey of BOTAN DOUROU, How the Story was Adapted from China to Japan and Vietnam" by Matilde Mastrangelo("Sapienza" University of Rome), Doan Le Giang(University of Social Sciences and Humanities-Ho Chi Minh City), Hsu Li Fang(Taiwan Changhua University)
- 7 Dec.: Lecture "Understanding Japanese through its Structure: How Linguistics Can Contribute to Language *Learning*" by Wesley M. Jacobsen(Harvard University)
- 11 Dec.: International Symposium- "Constraction of 'e-Japanology' "

by Hiroshi Sano, Tsutomu Tomotsune(Tokyo University of Foreign Studies), Takahiko Tsujisawa(Tokyo University of Agricultre and Technology), Masaki Nakayama(The National Diet Library), Toshie Marra(UCLA, East Asian Library), Kazuhiro Hayashi (The Chemical Society of Japan), Jun Katsuragawa(Book Designer)

- 17 Dec.: The 2nd Young Scholars Workshop "Japanese as a 'Lingua Franca' for the elderly native people in Taiwan" by CHIEN Yuehchen (National Dong Hwa University, Taiwan)
- 18 Dec.: "Contrastive Study for Japanese and Other Languages" The 3rd Research Seminar
- by Nam Yunjin, Toshihiro Takagaki(Tokyo University of Foreign Studies), Masaru Inoue (NINJAL)
- 28 Jan. 2011: Lecture "Ryukyuan Language Endangerment and the Response of Linguistics" by Patrick Heinrich(Dokkyo University)
- 17 Mar.: Research Conference "Towards a Construction of International Japanese Studies" Postponed by Zhao Hua Min(Peking University), Shyu Shing Ching (National Taiwan University), Yu Nai Ming (National Chengchi University, Taiwan), Hsiao Hsing Chun (Tunghai University, Taiwan), Yim Young Chol (Chung-Ang University, Korea), Shinichi Shirato (Meiji University), Wang Min(Hosei University)

Firsthand Examination of Overseas Universities and Research Institutions

- 13-18 Oct. 2010: Thailand(Thammasat University, Chulalongkorn University) Emiko Havatsu
- 26 Nov.-3 Dec. Egypt(Cairo University) Ryuko Taniguchi
- 1-4 Dec. Taiwan(National Taiwan University) Kyoko Nomoto • 20-29 Mar. 2011 Spain(Universidad Complutense de Madrid,
- Autonomous University of Barcelona) Toshihiro Takagaki
- 21-28 Mar. U.K.(SOAS, The Japan Foundation, University of Edinburgh) Masako Sawai
- 29 Mar.- 3 Apr. U.S.A.(Hawaii) Tatsuro Maeda

Meetings

- Center meetings: 2010 - 8 Oct., 11Nov., 2011 - 13 Jan., 18 Feb.
- Division meetings: 2010 15 and 26 Oct., 16 Nov., 8 Dec., 2011- 26 Jan., 21 Feb., 3 Mar.



・国際シンポジウム「e-Japanology の構築に向けて」報告 "Construction of 'e-Japanology'" Interna ・講演会「台湾『宜蘭クレオール』について」報告 "Yilan Creole in Taiwan : A Japanese-lexicon Cre ・研究会「『牡丹灯籠』の旅――中国、日本、ベトナム』報告 "The Journey of BOTAN DOUROU, ~ ・国際日本語教育部門ワークショップ(第2回)と講演会 報告 Workshop and Lecture Report by the · 対照日本語部門 活動報告 Activity Report : Contractive Japanese Division ・第2回若手研究者ワークショップ報告 The 2nd Young Scholars Workshop Report /・シリーズ:今 ・ジュネーヴ大学紹介(交流協定校紹介)Geneva University, Switzerland ·活動報告 Activity Report

国際シンポジウム「e-Japanologyの構築に向けて」開催 2010年12月11日(土) The International Symposium "Construction of e-Japanology" Report Sat. Dec. 11 2010

2010年12月11日、比較日本文化部門・国際連携推進部門共催の国 際シンポジウム「e-Japanologyの構築に向けて」が開催された(於・さ くらホール)。講演者は、佐野洋(本学教授)、辻澤隆彦(東京農工大学 情報メディアセンター教授)、友常勉(国際日本研究センター講師)、中 山正樹(国会図書館総務部情報システム課長)、マルラ俊江(UCLA 東 アジア図書館司書)、林和弘(日本化学会学術情報部課長)、桂川潤(ブッ クデザイナー)の各氏。

この間、東京農工大の辻澤氏と本学の佐野氏の提起を糸口として、二 部門で多摩地区における日本学・日本研究の学術デジタルネットワーク = e-Japanologyの可能性を検討してきた。今回の国際シンポジウムは、 求められる課題や現状認識を共有化することと、今後の取り組みにむけ たキックオフとして企画された。

"A concept of e-Japanology in cooperation among まず、①佐野・友常・辻澤の三報告では、「多磨地区大学連携にお universities in Tama district" ける e-Japanology の構想」について、グローバル化に対応しうる日本 Hiroshi Sano, Tokyo University of Foreign Studies Takahiko Tsujisawa, Information Media Center, Tokyo 学・日本研究の積極的な発信と学術発展のために、クラウド技術を活用 University of Agriculture and Technology した情報基盤を構築し、将来的には NII の協力をも視野に入れた連携 Tsutomu Tomotsune, Tokyo University of Foreign サービスを考え(佐野)、学術クラウドに向けた情報システム基盤・学 Studies "Current Situation of the Digital Library Concept and 術認証フェデレーション・システムの紹介と、プラットフォームを構築 Academic Digital Communication in Japan" Masaki Nakayama, The National Diet Library (辻澤)。そして発信型の日本研究の先行例として MIT の Visualizing "Japanese Studies in the U.S. from an Academic Cultures を紹介しつつ、5部門をベースにした国際日本研究センターに Library Perspective and Issues of Scholarly Digital Communication" よる e-Japanology の表現形態の提起(友常)がおこなわれた。②国会 Toshie Marra, UCLA, East Asian Library 図書館の中山氏からは「電子図書館構想と日本の学術デジタルコミュ "Current state of e-Journal and open-access in natural ニケーションの現状」と題して、1990年代までの電子図書館構想を経 science" Kazuhiro Hayashi, The Chemical Society of Japan て、現在進められている、館種を問わない全国図書館との連携強化、デ "Digitalization of knowledge and the emergence of ジタル化の拡大、そしてクラウド技術を活用した巨大なデータベース検 e-book in cultural history"

東日本大震災における交通機関の復旧状況等を考慮し、開催を延期しました。

Postponed due to recovery operation (i.e. public transportation or electricity) influenced by Eastern Japan Earthquake.



Tokyo University of Foreign Studies

http://www.tufs.ac.jp/common/icjs

tional Symposium \sim P1 \sim 2
eole" Lecture P2
Research Conference P3
e International Japanese Education Division $\hfill P4\sim 5$
P5
おもしろい本② Series: Interesting Books I Recently Read: 2
P7
P8



The International Symposium, "Construction of e-Japanology", co-hosted by the Comparative Japanese Culture Division and International Cooperation Division was held on Dec 11 at the Sakura Hall. The presenters were:

索サービスである NDL Search のイメージが紹介された。つづいて、③ マルラ俊江氏の報告は「海外の大学図書館からみた日本研究と学術デジ タルコミュニケーションの課題」。マルラ氏は米国の日本研究プログラム が規模を拡大させる一方で、在米研究者数、中国語資料・朝鮮語資料 と比した日本語資料の図書館蔵書数、さらに電子書籍のアクセスなどか らみて米国の日本研究が縮小傾向にあること。その上で課題として、学 術資料の制作・提供・利用のコミュニケーションの促進、機関リポジト リの整備とオープンアクセスの推進、電子資料と紙媒体など物理的資料 を駆使した統合的な日本研究資料の利用の促進を提起した。④林和弘 氏「自然科学領域における電子ジャーナル・オープンアクセスの現状と 課題」では、いち早く学術デジタル環境が整備されている自然科学領域 の現状について、ジャーナルの編集ソフト・XML を紹介しながら、商業 出版社や協会出版の寡占などの問題も指摘した。そして人文社会系への 提起として、モノグラフ・ギルド的なアカデミックスタイルを踏まえた 情報交流ネットワーク作りの重要性、さらに自国文化の発信などのポテ ンシャリティを提起した。最後に、⑤桂川潤氏「文化史のなかの〈知の 電子化・電子書籍化〉」では、電子化の長所を認めた上で、電子書籍が 「座標系」(読書主体の鳥瞰する力や公共性)の消失をもたらすという問 題性を指摘することで議論に一石を投じた。

それぞれの分野で現在、もっとも精力的に活動し発言している諸氏に よって、古典的な知と最先端の知の姿がつきあわされ、同時に日本研究 の国際環境についての認識を深める絶好の機会となった。とはいえ肝腎 の e-Japanology の内容について、本格的な議論はこれからである。シ ンポジウムにおけるさまざまな提起の消化に努めつつ、プロジェクトを 確実なものにしていきたい。 (友當勉)

Jun Katsuragawa, Book Designer

The possibility of creating within the Tama District an academic digital network on Japanology and Japanese Studies = e-Japanology in the fields of Japanese culture and international cooperation began with a proposal by Professor Sano and Professor Tsujisawa. This symposium was planned for participants to share issues they might face, understand the current situation, and as a kick start for future action.







林氏、(右上2人目) 辻澤氏、(左下) 桂氏、友常氏】

講演会「台湾『宜蘭クレオール』について」報告 2010年10月16日 (土) Lecture - "Yilan Creole in Taiwan : A Japanese-lexicon Creole"

社会言語部門主催で、大阪大学名誉教授、現奈良大学大学院教授、 真田信治氏を招き「宜蘭クレオール」のタイトルで、10月16日に講 演会を開催した。当日は30余名の出席者があった。宜蘭とは台湾東 海岸の県名で、アタヤル人の中で日本語との接触言語が、世代縦断的 に使われている事例の、現地でのフィールドワークの成果を中心に、 報告が行われた。宜蘭県の四つの村、3000人程度の話者人口がある と言われているが、自然談話の分析からの様々な検証は、これまで欧 米語のクレオール研究が中心であったこの分野に新たな視点を提供し てくれるものと思われる。宜蘭クレオールはアタヤル語が基層言語、 上層言語として日本語が考えられるが、独自に発展した文法などもみ られ、他のアタヤル語話者にも、日本語母語話者にも理解できない別 の言語体系となっている。日本統治時代だけでなく、国民党独裁時代 や、現代の台湾の少数民族政策の移り変わりに翻弄された、歴史的・ 社会的背景も含めた網羅的な講演で、参加者の関心も高く、活発な議 論が繰り広げられた。

最大の問題は、現在は漢語に圧されていることから、話者人口全体 の運用能力が決して保証される環境ではないこと、大学入試の科目か らも外されるなど他の少数民族語との関係が流動的なことなどで、継 承が危うくなっていることであり、世界中の少数言語がたどる道筋と の共通点もまた示された。 (前田達朗)



by Shinji Sanada, Professor Emeritus at Osaka University and current Professor at Nara University, entitled "Yilan Creole in Taiwan : A Japanese-lexicon Creole". Professor Sanada introduced findings from his fieldwork in Yilan which discovered the influence of Japanese on the indigenous language, giving rise to a language called Yilan Creole which has a unique grammatical structure different from the Atayal language and Japanese. This discovery is expected to provide a new perspective to the field of creole research, which has so far focused on the Western languages. The comprehensive lecture also covered the historical and social backgrounds, and presented the major problems encountered in preserving the language, such as the pressure from the Chinese language, and a non-conducive environment for using it. More than thirty participants attended the lecture and participated actively in lively discussions till the end. (Tatsuro Maeda)

「『牡丹灯籠』の旅一中国、日本、ベトナム」報告 2010年11月12日 (金) "The Journey of BOTAN DOUROU, How the Story was Adapted from China to Japan and Vietnam"

比較日本文化部門・国際連携推進部門の共催による研究会『牡丹灯 籠の旅一中国、日本、ベトナム』が開催された(本部棟中会議室)。報 告者はマティルデ・マストランジェロ氏 (ローマ大学)、ドアン・レー・ ザン氏 (ホーチミン市人文社会科学大学)、許麗芳氏 (台湾彰化大学)、 コメンテーターに中国文学の千野明日香氏(法政大学)。

中国明代の瞿佑 (1341-1427) の 『剪灯新話』 に収録された 『牡丹燈記』 はアジアの各地に伝わり、中世日本にも伝承された。近世日本では浅井 了意や上田秋成の翻案物が知られているが、さらに明治期にこれを翻案 した三遊亭円朝の『牡丹灯籠』が寄席で演じられ、好評を博した。この 国際研究会は、こうして伝播したひとつの説話が、世界各地でどのよう に受容され変容したかをたどることで、文学的想像力の旅を論じてみよ うという試みである。

マティルデ・マストランジェロ氏「『牡丹灯籠』の旅・西洋への旅」 がとりあげたのは、円朝の評判を聞き、菊五郎の「牡丹灯籠」を観劇し、 この物語の翻案を企てたラフカディオ・ハーンである。ハーンの翻案「宿 世の恋」は円朝の筋書きに盛られている話芸に呼応するかのように「自 分のコメント、解釈」を大胆に挿入した。末尾に「最後まで怪談噺を 読んでくださった君は全て真実だったと思っていましたか」と読者に語 りかけたハーンは話芸の核心を心得た作品の加工を施した。マストラン ジェロ氏は、円朝とハーンという二人の話芸の達人の解釈によって、「牡 丹灯籠」の旅は西洋に到ることができたのだと締めくくった。

ドアン・レー・ザン氏「〈木綿樹伝〉(阮嶼『傳奇漫録』)と〈牡丹燈記〉(瞿 佑『剪灯新話』) ―― 比較考察」がとりあげたのは、ベトナムにおける 『剪灯新話』の翻案である阮嶼(15世紀末~16世紀初?)の『伝奇漫録』 である。オリジナルとベトナム版とのふたつの伝奇集の対応関係と、「牡 丹燈記」と阮嶼によるその翻案である「木綿樹伝」の相違を詳細に検討 することで、前者の勧善懲悪と説教調が後者ではロマンティックな人と 妖魔の愛の物語に変容していることを指摘した。

許麗芳氏「叙述形式と価値意識の踏襲――『牡丹灯記』の伝播と改 変に関する分析」は、台湾における1980年から今日までの30年間の『剪 灯新話』研究史の浩瀚な内容を紹介した上で、中国文学の詩的精神を 論じ、それをもって、浅井了意と上田秋成が翻案した伝奇文学と比較し た。両者のあいだにみられる共通性は、美学的共感であるだけでなく、 作者が序文・跋文・評点・注釈を加えるという中国文献学的な作法でも ある。ここから了意も秋成も中国文学を省察していたことがうかがえる が、そこにまた日本の作家たちに中国詩学が 継承されていること、そして漢学の伝統を踏 まえた対話と交流がみられるとした。



ひとつの説話物語をめぐる想像力の旅に ついて、複数の言語によって、時間的制約 だけを設けて論じあうという、ぜいたくな研 究会であった。司会の川口健一氏が再三繰 り返したことだが、多言語による文学の議論 が外語大で実現したのは偶然ではない。今 後とも試みたい企画である。 (友常勉)



The research conference, "The Journey of BOTAN DOUROU, How the Story was Adapted from China to Japan and Vietnam", co-hosted by the Comparative Japanese Culture Division and International Cooperation Division was held on Nov 12 in the Medium Conference Room, Administration offices. The presenters were:

Professor Matilde Mastrangelo, "Sapienza" University of Rome

Professor Doan Le Giang, University of Social Sciences and Humanities. Ho Chi Minh City

Professor Hsu Li Fang, Changhua University, Taiwan Professor Asuka Senno of Hosei University facilitated the session. In her talk, "The Journey of BOTAN DOUROU, The Journey to the West", Professor Mastrangelo explained that it was Lafcadio Hearn who, after hearing about Encho's reputation, and watching Kikugoro's "BOTAN DOUROU", planned the adaptation of this story. She ended by saying that thanks to the interpretation of the two master story-tellers, Encho and Hearn, "BOTAN DOUROU" could make it to the Western shores. Professor Doan's talk, "Chuyên cây gao (in "Truyền kỳ man luc" by Nguyễn Dũ'") and "BOTAN TOUKI" (in "The New Discussions of Jiandeng" by Cù Hu'u) - A Comparative Analysis", explained that "Truyền kỳ man luc", written by Nguyễn Dữ (late 15th century - early 16th century?) was an adaptation of Cù Hưu "The New Discussions of Jiandeng". Comparing the corresponding relationship between the original and Vietnamese versions, and the differences in "BOTAN TOUKI" and Nguyễn Dũ"s adaptation, "Chuyên cây gạo", he pointed out that while the former took on a moralistic tone, in the latter it changed into a romantic love story between a human being and a spirit. Lastly, Professor Hsu introduced the voluminous research on "The New Discussions of Jiandeng" that has taken place in Taiwan for thirty years since 1980, and made comparisons to adaptations of romantic literature by Ryoui Asai and Akinari Ueda in her talk, "Conforming to the Narrative Style and Value Consciousness - An Analysis of the Transmission and Changes in "BOTAN TOUKI"". (Tsutomu Tomotsune)



【(左から)マストランジェロ氏、許氏、(右)レー・ザン氏】

国際日本語教育部門 第2回ワークショップ・講演会 The 2nd Workshop and the Lecture Report : International Japanese Education Division

国際日本語教育部門では、プロジェクト「日本語学習者の母語・地域 性を踏まえた日本語教育研究」の一環として、ワークショップ(第2回) と講演会を開きました。

「日本語とアラビア語ー対照研究と教育への応用ー」 第2回ワークショップ

日時:10月2日(土)14:00~17:00 会場:東京外国語大学府中キャンパス本部管理棟2階中会議室 発表者および題目

エルカウィーシュ・ハナーン氏(カイロ大学文学部日本語学科准教授・ 本学外国語学部特任外国語教員)「アラビア語と日本語の音声」 エバ・ハッサン氏(東京大学総合文化研究科博士後期課程) 「アラビア語と日本語の文法」

ワークショップには、日本語教育やアラビア語を専門とする教員や学 生など40名余りの参加者がありました。アラビア語の発音練習を交え、 日本語並びにアラビア語の国内における教育に関し、活発な議論が交わ されました。

エルカウィーシュ・ハナーン氏「アラビア語と日本語の音声」発表要旨: エジプト人日本語学習者の音声習得上の困難点としては、促音、長音、 拗音、母音の前の撥音(例「タンイ」=単位)、破擦音と摩擦音の区別 (「tsu」と「su」、「tfi」と「fi」)、母音の識別([i]と[e]、[u]と[o]) などが挙げられる。また、アラビア語は強勢アクセントであることから、 日本語の高低アクセントの知覚がしにくいことがある。一方、日本人の アラビア語学習者の困難点としては、咽頭化音と非咽頭化音の弁別、咽 頭音 (/ ħ // 오/)、軟口蓋摩擦音 (/x// y /) など有声無声の区別、咽頭 音 / ħ / と声門音 /h/、/r/ と /l/ などの弁別がある。

指導方法としては、エジプト人日本語学習者と日本人のアラビア語学習 者のいずれに対しても初級の段階から、発音上の困難点について説明し たうえで、目標言語の音を聞かせて、母語に近いものを自ら発見させ、 母語と目標言語の音声上の違いを意識化させることが効果的である。

エバ・ハッサン氏「アラビア語と日本語の文法」発表要旨:

アラビア語と日本語の相違を格、自他の対応、受身という観点から比較 した。アラビア語の主格-u(n)、与格・属格-i(n)、対格-a(n)は、日本語 と必ずしも対応しない(たとえば、日本語の「その犬に触らないで」は アラビア語では "la taimis ha:ða l-kalib-a" となり、対格が使われる)。 アラビア語の自他対応動詞のうち、自動詞は、自発性及び対象がある結 果状態に自然になった場合に表現される。また、自動詞の受身構文はア ラビア語にも存在するが、日本語の「近所の人々に遅くまで踊られた」 という迷惑受身は、アラビア語では、出来事が過度に行われたという意 味になる。これらの相違は今後、動詞の他動性という観点から比較考察 を進める必要がある。

「日本語教育のための言語学ー日本語の言語構造と日英対照の視点か らー」講演会

日時:12月7日(火)()講演14:50~16:20(2)談話会 16:30~17:20 会場:①東京外国語大学府中キャンパス アゴラグローバル内プロメテウスホール



【エルカウィーシュ・ハナーン氏】

Under the project "Japanese Language Education in the Light of Learners' Mother Tongue and Regionality", the International Japanese Education Division organized the following workshop and lecture:

Workshop (Oct 2, Medium Conference Room, Administration Offices)

Title: "Japanese and Arabic Languages: Application to Comparative Study and Education" Speakers: Associate Professor Hanan Rafik Mohamed

El-kawiish, Cairo University;

Eba Hassan, PhD Candidate, Tokyo University

The workshop was attended by more than 40 Japanese language instructors, Arabic specialists, and Arabic learners. The participants watched a demonstration on Arabic pronunciations and contributed actively in discussions on Japanese and Arabic education in Japan. Professor Hanan's lecture touched on the difficulties Egyptian Japanese learners face in terms of phonetics and phonology and the reasons behind these errors. She also introduced examples of language transfers that Japanese Arabic learners produce, and demonstrated Arabic pronunciations to the audience. She opined that an effective way to teach is to explain the difficult pronunciations to the learners, let them listen to the sounds of the respective target languages and help them realize the differences themselves.

Ms. Hassan explained the difficulties faced by native Arabic learners when learning Japanese by comparing the case structures of Japanese and Arabic, and pointing out the differences in transitivity between the two languages using examples of transitive and intransitive variations, passive and causative constructions. Further comparative research into the differences is required from the perspective of transitivity.



Lecture (Dec 7, Prometheus Hall, Agora Global) Title: "Understanding Japanese through its Structure: How Linguistics Can Contribute to Language Learning" Speaker: Professor Wesley Jacobsen, Harvard University

Professor Jacobsen's lecture was attended by more than 70 international students, members of the public and staff. The lecture introduced three types of structure that linguists deal with in talking about Japanese and showed

②東京外国語大学府中キャンパス本部管理棟2階中会議室 発表者および題目:ウェスリー・ヤコブセン氏(ハーバード大学教授) 使用言語:英語(日本語通訳あり)

内容は、主に学部生に向けた日本語と英語の言語構造についてであ り、留学生をはじめ、市民聴講生、教員など、70名以上の参加者が集 まりました。

発表要旨:日本語学習においては、3つの言語構造(Argument Structure (項構造), Information Structure (情報構造), Immediate Constituent Structure (樹形図)) に注意を払うことが、複雑な言語構 造を理解する上で役に立つ。動詞は、一項動詞(「走る」)、二項動詞(「食 べる」)、三項動詞(「あげる」)のように項の数が異なり、複文や使役な ど構文が変わることにより、出現に異なりが見られる。また、情報構造 の観点から見ると、日本語の助詞「ハ」は旧情報、「ガ」は新情報を示 している。さらに、文の樹形図を描くことで、単なる単語の左右の羅列 としてではなく語と語の上下関係を捉えることができる。 上記3つの観点から言語の類型化が可能であり、日本語が決して特別な 言語とは言えないことがわかる。

対照日本語部門 活動報告 **Activity Report : Contractive Japanese Division**

対照日本語部門では、今期の活動として研究会とデータベースの構築 を行った。

(1)「外国語と日本語との対照言語学的研究」第3回研究会 日時:2010年12月18日(土)15:15~18:00 場所:東京外国語大学 語学研究所(研究講義棟4階419号室) 発表者および発表題目:

南潤珍氏 (本学大学院総合国際学研究院)

「類義関係からみた日本語と韓国語の語彙の対応関係」 高垣敏博氏(本学大学院総合国際学研究院)「日本語とスペイン語の受動文」 井上優氏(国立国語研究所)「言語研究における対照研究の位置づけについて)

南氏はご専門の韓国語と日本語について語彙の問題を、高垣氏はご専 門のスペイン語と日本語について文法の問題をとりあげ、対照言語学的 な観点から類似点や相違についてご発表くださった。井上氏は、対照研 究のありかたや進め方について、日本語・中国語・韓国語の具体的な事 実にもとづいた刺激的なご見解をお聞かせくださった。研究会には、本 学教員・大学院生・学部学生のほか学外の方々も含め40名ほどの参加 者があり、活発な質疑応答や意見交換が行われた。

(2) 日本語と他言語との対照言語学研究の文献情報をデータベースと して構築:スペイン語と日本語の対照言語学的研究についての研究論



文や書籍などの書誌情報の データベース化に向けてリス トを作成中であり、完成に近 づいている。このノウハウを 生かして、ポルトガル語と日 本語との対照研究について も文献調査を始めている。

【ご発表を終え、考えをめぐらせていらっしゃる井上氏、南氏、高垣氏】

(谷口龍子)

how these can serve as useful tools for teachers and learners of Japanese as well, particularly in comparative perspective with English. They are (1) Immediate Constituent Structure (knowing the vertical relationship between words in a sentence); (2) Argument Structure (knowing the number of words a verb needs in order to function accurately and how it can change according to the types of sentences); and (3) Information Structure (being able to understand the link between what is being talked about now and what went before, .e.g., 'wa' refers to old information while 'ga' refers to new information). According to Professor Jacobsen, Japanese is not a peculiar language as it shares with all human languages the property of having structure to it. (Ryuko Taniguchi)



(早津恵美子)



The Contrastive Japanese Division organized

(1) the 3rd Research Seminar, "Contrastive Study for Japanese and Other Languages" and invited Professors Nam Yunjin and Toshihiro Takagaki from TUFS, and Professor Masaru Inoue from NINJAL to make presentations. Prof. Nam and Prof. Takagaki compared the similarities and differences between Japanese and their respective research languages, Korean and Spanish, from the perspective of contrastive linguistics. Prof. Inoue used specific examples from Japanese, Chinese and Korean to explain his opinions on how contrastive research should be carried out. About 40 participants attended and contributed actively to the discussions.

(2) Building a Document Information Database for Contrastive Linguistics Research on Japanese and Other Languages

The list of academic papers and books on contrastive research between Spanish and Japanese to make into the document information database is almost complete. Document research on contrastive research between Portuguese and Japanese has also started.

(Emiko Hayatsu)

第2回若手研究者ワークショップ開催 2010年12月17日 (金) The 2nd Young Scholars Workshop Fri. 17 Dec 2010



12月17日に第二回若手研究者ワーク ショップを開催しました。報告者は簡月真氏 (台湾国立東華大学副教授)、報告のタイトル は「台湾に渡った日本語の現在―リンガフラ ンカとしての姿」でした。統治期に持ち込ま れた日本語が、「日本語世代」とよばれる高 齢者の間で、リンガ・フランカ〜地域共通語 ~として使われることがあることは知られて いましたが、その実態や言語運用の詳細は、 【簡月真氏】 研究が少ないままでした。簡氏が言及したよ

うに、日本語の存在は、特に国民党独裁時代には「忌むべきもの」であり、 触れにくいものでした。このような研究を「植民地主義的だ」と批判す る人はいまもいますが、そのような歴史的背景を踏まえてもなお、研究 すべき対象だと考えた簡氏の、フィールドワークの成果とその分析が、 時間いっぱい語られました。40名近い参加者からも、数多くの質問が寄 せられ、活発な議論が繰り広げられました。本来台湾の日本語にあった 西日本、特に九州方言の強い影響だけでなく、時間をかけて文法化、合 理化されていった様々な特徴は、独自のものだといえます。こういった 変化はまた、日本語のこれからの変化を先取りしたものである可能性も 示され、日本語の多様性は、日本国内の日本語だけが担うものではない こともまた強調されました。建設的な批判も含めた議論は、報告者、参 加者双方にとって、有意義なものであったといえます。 (前田達朗)

It was held on Dec 17 and Chien Yuehchen (Assistant Professor, National Dong Hwa University, Taiwan) made a presentation on "Japanese brought over to Taiwan -Existence as a Lingua Franca". It is known that Japanese brought over to Taiwan during the Japanese rule is used as a lingua franca among a group of elderly people known as the "Japanese Generation", but the actual situation and language usage have so far not been well researched. According to Chien, Japanese was a taboo subject to be avoided under the Kuomintang rule. Even though her research had been branded as "colonialistic" by some people, Chien insisted that it was a subject worth researching even with that kind of historical background. Making full use of the time, she presented the results from her fieldwork. Western Japanese, especially Kyushu dialects have traditionally been a great influence on Japanese in Taiwan, but over time, many unique features have been produced due to grammaticalization and rationalization. Chien pointed out that these changes might possibly be advanced notice of future changes in Japanese,



and emphasized that the diversity of Japanese need not be restricted to Japanese within Japan. Close to forty participants attended the workshop and many questions were asked. Lively discussions, including constructive criticisms had surely benefitted both the presenter and the participants. (Tatsuro Maeda)

今おもしろい本 (2)

Interesting Books I Recently Read : 2

国際日本研究センターのスタッフが、専門領域の周辺で、誰にでも興 味を持ってもらえそうな書物や作品を紹介していきます。第二回は国際連 携推進部門の友常勉(当センター専任講師、専門:日本思想史・日本文化 史)が担当します。

藤井貞和『日本語と時間- (時の文法) をたどる』(岩波新書2010年) 日本語の古語には時間をあらわす7つの「助動詞」(著者は〈助動辞〉と呼 ぶ) ーき・けり・ぬ・つ・たり・りーがある。著者はこの7種に「けむ・あ り」を付け加え、しかも「あり・り」を同一視するのでその場合には8種。 これは古代人が7ないし8の〈時の助動辞〉を使い分けていたことを示して いる。『源氏物語』をはじめとして、物語の伝統は非過去の文体で書くのが もっぱらであった。「刻々と現在が移り進むかのように」叙述されるのであ る。対話のなかで、物語のなかで〈時の助動辞〉は現在を起点として働く が、ときにそこに時制があらわれ、あるいは時制から自由に動いている。本 書では、こうした助動辞が「時間域」「推量域」「形容域」の三領域にわたっ て相互依存して動く相関図である「krsm四面体」の提起をはじめ、「けり」 や「たり」などの文法上の論争、大森荘蔵の時間論、坂部恵のアオリスト についての神話論的議論などへの検討を通して、日本語なるものの特性が 一時間表現を発達させたそのシンギュラーな姿が一明らかにされる。日本 語の臨界点を示すなかで、文字と反対側にある演劇言語や、日本語と異 なって人称を発達させたアイヌ語と対比する著者の身振りは華麗でスリリン グである。それは詩人でもある著者が日本語というコトバを常に実験にさら しているからだ。例えば芭蕉の「古池や」の句をアイヌ語訳するならば、こ の蛙は「ぜひ複数だと決めたい」と著者はいう。そのアイヌ語訳、ぜひ読ん でみたい。それは越境と侵犯の快感を体験することになると思う。(友常勉)

Staff at the Center will take turns to introduce books and other literary works related to their respective specialties which are of interest to anyone. The second introducer is Tsutomu Tomotsune (Full-time Lecturer, specialty: Intellectual History and Cultural Studies of Japan) from the International Cooperation Division Sadakazu Fujii's "Nihongo

to Jikan – 'Toki no bunpo' o tadoru" (Iwanami Shinsho, 2010)



TRANA

交流協定校紹介④ スイス ジュネーヴ大学 Introduction of International Partner Universities – Geneva University, Switzerland

ジュネーヴ大学文学部専任講師の小幡谷友二氏にご協力いただき、和 文・英文共にご寄稿いただきました。 [交換協定]

1987~89年、ピエール・スイリ教授の東京外国語大学への招聘(客 員教授)がきっかけとなり、2004年、東京外大とジュネーヴ大の間に学 術交流・協力に関する協定が締結された。その後定期的に学生交流が続 いていて、東京外大の交換留学生の優れた仏語運用力には定評がある。 [大学概要]

1559年に創設されたジュネーヴ大学は今日、スイスの仏語圏におい て指導的な役割を果たしている総合大学で、20校から成るヨーロッパ 研究大学連盟(LERU)の一員である。7学部(理科学、医学、人文学、 経済学 - 社会科学、法学、神学部、教育心理学)と翻訳通訳学校に加え、 複数の学際センター(生命科学、財政学、環境学)を擁し、正規学生1 万4500人(出身国140以上)と生涯教育プログラム登録者1万人以上 が通うジュネーヴ大学は、スイスで2番目に大きい大学である。取得可 能学位は300種類以上、非常に広い分野をカバーする200以上の生涯教 育プログラムが提供されている。

[日本学科概要]

東京日仏会館館長やフランス国立東洋言語文化研究所(INALCO)教 授などを歴任し、今秋フランスで『Nouvelle histoire du Japon (新し い日本の歴史)』を上梓したスイリ教授はジュネーヴ在住だが、当学科 のロズラン教授(日本文学)、グリオレ特任教授らはパリの東洋言語学 部でも教鞭をとっている。また、協定校のヴェネチア大学との間では講 師が定期的に行き来して集中講義を行っている。

日本学科は正確には「地中海・スラヴ・東洋言語文化学科」(MESLO) に含まれる日本語セクションである。MESLO ではギリシア、アラビア、 ロシア、アルメニア、中国、朝鮮、日本などの言語・文化が教えられて いて、近年は日本語や中国語を選択する学生の数が延びている(文学部 の学生総数2760人に対し、日本語を選択した学生は2008年度が108 人、2009年度が120人)。

[日本学科の特色]

ジュネーヴ大学は2つの専攻が必修のため、言語学、宗教史、翻訳学 などを学びながら日本語を履修する学生も少なくない。そのため1・2 年生の興味の対象は多岐に及ぶ。中国語と日本語を同時に勉強している 学生もかなりいる。もう少し上の学年では、単に「日本語」の修得だけ でなく、「日本の宗教や歴史」へと重点が次第に移っていく(「日本語教 育」いわゆる語学の授業の割合は72 [1年]、66 [2年]、38% [3年])。 [近年の傾向-マスター・アジア]

「マスター・アジア」は、ジュネーヴ大学文学部、同大学経済学 - 社 会科学部と、国際関係を専門とする国際開発研究所(IHEID)が共同で 運営している修士課程である。日本だけでなく中国、朝鮮、東南アジア などを含めたアジア全体を専門とする人材を育てるための修士課程と言 える(従来の日本学の修士課程も並存している)。具体的には「知的交流、 力関係、帝国主義-19~20世紀の知的歴史を通してみた極東」、「東ア ジアの〈奇跡〉から世界の〈再配列/再東洋化〉」といった授業が討論 形式で行われている。共同セミナーの開催や共同研究プロジェクトの推 進を通じて、近年中国語セクションとの関係が深まりつつある。 (小幡谷友二氏 ジュネーヴ大学)





【Bastions 校舎。裏側が公園になっている】

- Exchange agreement

Following Professor Souyri's invitation to Tokyo University of Foreign Studies (TUFS) as a guest professor in 1987-89, the University of Geneva (UNIGE) and TUFS signed an academic exchange and cooperation agreement. Student exchanges have been regular since then. - Description of the University

UNIGE was founded in 1559 and stands out as one of the twenty best research universities in Europe. With 14,500 students from more than 140 different countries and more than 10,000 students enrolled in continuing education programs, it is Switzerland's second largest university. In addition to its seven faculties - Sciences, Medicine, Humanities, Social Sciences and Economics, Law, Theology, and Psychology and Educational Sciences - and its School of Translation and Interpretation, UNIGE also comprises several interdisciplinary centers in areas ranging from Life Sciences to Finance and Environmental Studies.

- Description of the Japanese Studies Section

The Japanese Studies Section is part of the Département de langues et de littératures méditerranéennes, slaves et orientales (MESLO). MESLO offers language classes in Greek, Arabian, Russian, Armenian, Chinese, Korean and Japanese, and exposes students to different cultures. The number of students who major in Japanese and Chinese language and culture has been increasing in recent years. Among the 2,760 students in the Department of Literature in 2009, 120 were enrolled in Japanese Studies (108 in 2008). Students at UNIGE are required to study two majors; students are thus simultaneously majoring in Japanese Studies and another subject such as Linguistics, History of Religions, Translation Studies, etc. Many students choose to study Chinese and Japanese Studies together. As the students progress, the focus slowly shifts away from mastering Japanese to studying the history and religion of Japan (the percentage of language studies decreases gradually from 72% (1st year), to 66% (2nd year) and 38% (3rd year)).

Recent trends

Advanced students can study towards a Master's in Japanese Studies, or choose to major in a Multidisciplinary Master in Asian Studies (MASPEA, http://www.unige.ch/ maspea/index.html), a Master's program jointly offered by the Faculties of Humanities, Economics and Social Sciences, and the Graduate Institute of International and Development Studies. MASPEA brings together specialists in Asian studies, including not only Japanese but also Chinese, Korean and Southeast Asian studies. A good knowledge of French and English is required to attend the Master's programs.

In recent years, the Japanese Studies Section has also increased its collaboration with the Chinese Studies Section and has been organizing joint seminars and research projects.

(Yuji Obataya, Geneva University)